

はじめに

今回おとどけする『奈良国立文化財研究所年報1994』は、当研究所の1993年度における活動状況の概要の報告である。

奈文研は、1952年4月、美術研究室・建造物研究室・歴史研究室・庶務室の4室、定員15名から出発した。調査と研究が進展するなか、1954年度からは学報と史料のシリーズの、1958年度からは年報の刊行がはじまった。設立後42年経過したいま、研究所は3部・1館・1センター・2室、定員86名の機構となっている。

創設当初の所員は、昨年度の鈴木嘉吉前所長を最後として、すべて退官された。その点からだけでも、奈文研は新しい時代をむかえた、といってよいであろう。新しい時代への突入は、また、ここ数年の活動の内容の変化にもあらわれている。

そのひとつは国際的な研究交流の活発化である。奈文研は、文化財の豊富な関西地域において実物に接するなかで保護行政に資する調査と研究を進める機構として設置された。それには変りはないが、設立以降蓄積してきた知識と経験、とくに建造物や遺跡など、不動産的な文化財に関するそれが評価され、国際交流のなかでその知識と経験を生かすことを求められているのである。昨年度53件にのぼった所員の外国出張や海外から受入れた43名の研修員の人数にその一端があらわれている。5年前、1988年度では、外国出張3件、海外からの研修員は2名にすぎなかったのである。

奈文研の調査研究は、設立当初に実施された「南都諸大寺の研究」にみられるように、美術史や建築史、庭園史、文献史、考古学など文化財を対象とする歴史関係の研究分野の、いまふうにいえば、学際的研究を大きな特徴としていた。それが現在の研究所の学風の基盤となっている。ここにも変化が加わりつつある。とくに自然科学系の研究分野との共同研究、あるいは、それとの境界領域における研究の進展である。今後の文化財に関する調査と研究を展望するとき、この傾向がいっそう強まり、従来からの調査研究にくわえて、それがこれからの研究所の進むべきひとつの方向になることは疑いない。

1993年度には、平城宮跡で朱雀門と東院庭園の復原事業がはじまった。景気浮揚のための補正予算として事業の着手が決定されたのだが、1978年に文化庁が策定した「特別史跡平城宮跡保存整備基本構想」通称「平城遺跡博物館構想」のうち、ほとんどが未着手だった遺構復原が本格化したのである。さらに、第一次大極殿院地区復原のための調査研究も継続中であり、その復原事業の開始も近いことであろう。1959年に着手した継続的な発掘調査と1964年にはじまる整備、研究所が担当してきた平城宮跡における多様な事業もまた新しい段階をむかえたといってよい。

この年報をご覧いただき、新しい時代にたちむかいつつある研究所の多様な調査研究事業の一端をご理解いただき、今後かわらぬご指導とご支援、さらにご鞭撻を願ってやまない。

1994年10月

奈良国立文化財研究所長

田 中 琢